

四年制大学社会福祉系学科における資格取得支援 ー保育士資格取得支援を通じてー

木 村 容 子

はじめに

従来、大学は教育を受け修了した証である学位の授与機関として機能してきたが、1990年代に入ってから学位に加え資格取得支援に力を入れはじめている大学も数多くなってきた（国立教育政策研究所 2003）。この背景には少子化による入学志願者の減少、不況による就職率の悪化などのあおりを受け、大学が入口および出口での大きな変化に直面した時代であり、このような大学の動きは、「学位」に加えて卒業生に「+ α 」の価値を付加することを目指す試みといえるものである（河野 2005）。2000年代に入ると、フリーターの増加やニートの出現などの問題、学校機関では進路未決定者が増加するという問題への対応として、学生一人ひとりの勤労観、職業観を育てるキャリア教育が大学にも導入されはじめた（中島 2008）。

わが校も例外ではない。2007年度から大学への入口から出口まで学生一人ひとりを支援するエンロールマネジメントやキャリア教育に取り組みだし、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」にも選定され、積極的に推進されている。これらと学科独自の取り組みとの連動も徐々に進んでいるが、資格・免許取得に関して筆者の所属する社会福祉学科では、社会福祉士と精神保健福祉士の受験資格が取得でき、高校（福祉）をはじめいくつかの教員免許や社会福祉の特定分野における資格取得を奨励している。

筆者は2007年度より社会福祉学科の保育士資格取得支援の担当をしているが、どのように取り組んでいくべきか試行錯誤しながらすすめているところで

あり、保育士資格取得支援への方針や体制および具体策を整備していかなければならないと感じている。そこで、本研究では、社会福祉学科の学生における保育士資格取得の実態や、学生が大学（学科）に望む保育士資格取得への支援についての質問紙調査を実施し、その結果を今後の支援へのヒントとして役立てようとする。

I. 学生の資格志向

1. 大学の現状

日本私立大学連盟の『私立大学学生生活白書 2007』によれば、学生の大学進学理由は約 5 割が「学歴が必要」とのことであるが、「自分のしたいことを探す」(35.7%) は 4 年前の前回調査からポイントが減り、「専門的知識・技能を身につける」のポイントが上昇している (34.1%)。また、大学生活に興味を持っていることのなかには、「クラブ・サークル活動」「大学の勉強」「資格取得」が 20% 強の同等で並んでいることなどもこの調査では見られ、『学歴』とはいつでも、未来志向型。『大卒』という肩書きだけでは、社会で勝負できないのは分かったうえで、自分の人生のキャリア形成の一環として、大学を位置付けようとしているようだ」と日本私立大学連盟は学生の大学に対する見方を分析している。

これら大学の資格取得支援への動向と大学生らの大学に対する期待とは表裏の関係にあるが、この傾向は大学受験の難易度の低い大学とそれらの学生により見うけられるという報告もある（ベネッセ文教総研 2000：葛城・山田 2005）。学生の資格志向の高まりが山田（2003）の仮説立てる「学歴社会への対抗策」「学歴社会の崩壊による新たな差別化指標」によるものだとすれば、難易度の低い大学の学生が資格のそうした機能をより切実に求めているのだらうと、葛城・山田（2005）は推察している。

しかしながら、大学が取得支援する資格は学部・学科との親和性が高いわけではなかったり（山田 2003）、あるいは資格取得を望んで入学してもその後資

格を取得する上での困難やメリットとのかね合いで断念したり、資格を取得してもその資格を活かした職業に就くわけではなかったり（織田・石堂・浜田ら 2006：寺山・畑 2006）という現象も一方では起こっているのである。

2. 社会福祉系学部・学科における現状

(1) 社会福祉士養成課程のある大学で取得できる資格

2006 年度現在、学校連盟および日本社会福祉士養成校協会に所属している福祉系学部・学科、大学院のある四年制大学・短期大学・専門学校（専修学校）は 260 校ほどある。日本社会福祉教育学校連盟が行った 2006 年度卒業生の進路等調査（2008）では、回答した社会福祉士養成をしている大学 106 校のうち、社会福祉士受験資格と併用して取得できる資格のある四年制大学は、精神保健福祉士受験資格が 64 校、介護福祉士が 13 校、保育士資格が 22 校である。

また、資格の取得支援に関するデータは見あたらないが、たとえば中島（2008）による社会福祉系学科のある大学でのキャリア教育に関する調査では、先駆的なキャリア教育実践を行っている大学を対象とする上で社会福祉教育と社会福祉分野への卒業生の就職に実績があり、キャリア支援に関する独立した部署をもっていること、キャリア支援の独自のプログラムがある等を基準とし、8 校の実態をインタビュー調査している。そのなかでもキャリア支援の科目をカリキュラムに設置している大学社会福祉系学科はまだ少なく、資格取得の支援に目を向けると、その学科で取得できる主資格の社会福祉士や精神保健福祉士国家試験に関するものが中心であった。受験対策講座、受験対策を目的とした科目の設置、受験対策委員会の設置や、自主学習や教員によるグループ学習・個別指導といった取り組みを行っている。ほか、教職における公務員講座（教員採用試験対策）、ホームヘルパー 2 級講座、介護福祉士と保育士に関するもの（人数が記載されているが、それが課程修了での資格取得コースをさすのか、国家試験受験の講座等の開設をさすのかは不明）を行っている大学があるということである。

(2) 社会福祉士養成課程のある学科・コースの卒業生の就職状況

先の日本社会福祉教育学校連盟による進路等調査（2008）によると、社会福祉士養成課程のある大学 106 校における就職は、福祉・医療系が 47.0%、一般企業が 25.8% で 7 割強を占め、その他は少数で並ぶ。福祉・医療系での就職先は、老人福祉施設が 27.7%、医療法人が 20.7%、児童福祉施設が 11.2%、福祉サービスを行う営利法人が 10.8%、知的障害者援護施設が 9.3% と続く。職種では、介護が 41.1%、相談援助が 33.7%、保育が 10.1% で全体の大方を占める。

保育職に着目すると、児童福祉施設が 6 割ほどを占め、「その他の社会福祉施設・事業」や社会福祉協議会、福祉サービスを行う営利法人が 5～6% ずつとなっている。これらは、保育士資格を有することが就職要件に入っているかや保育士資格を有した学生が他職種にどれほど存在しているかは不明であるが、社会福祉士養成課程を卒業する学生の福祉・医療系就職における 2002 年度からの推移からすると、保育職での就職は 5% 前後から 11% へと増加している傾向がみてとれる。

Ⅱ. 本学社会福祉学科における資格取得支援に関する現状

1. 取得できる資格・免許

本学社会福祉学科の福祉教育は、3つのプログラムから構成される（図1）。主軸になるのは、主要3資格として社会福祉士受験資格、精神保健福祉士受験資格、高校一種（福祉）の教員免許を目指す「プロフェッショナル・プログラム」である。それに加え、保育士国家試験受験、ホームヘルパー2級資格取得、福祉住環境コーディネーター資格の受験などの特定分野における資格取得を目指す「福祉チャレンジ・プログラム」、そして福祉を学びつつも将来は広い範囲の就職やステップアップを考える学生のためのプログラムとして、小学校一種、中学校一種（社会）の教員免許や大学院進学・海外留学などを支援する「福祉展開プログラム」がある。

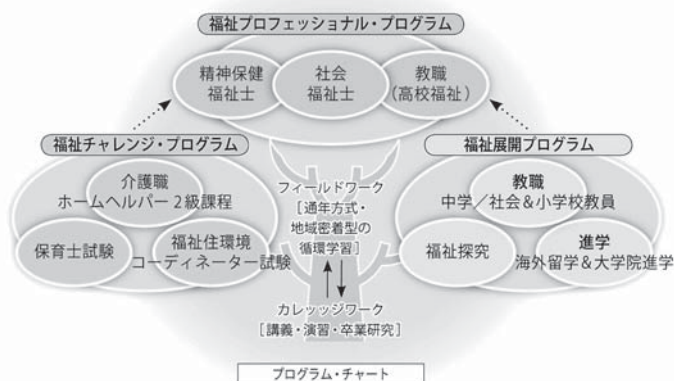


図1 社会福祉学科のプログラム・チャート

2. 資格取得支援の現況

(1) 基盤的取り組み

まず、基盤となる取り組みとして、全学でのキャリア教育とも関連し、本学科では2005年度より開講した「キャリアデザイン講座」の履修を勧めている。学科独自の新生のホームクラスとなる「社会福祉基礎演習Ⅰ」（ゼミ）では、就労意識の喚起を目的とし、社会福祉現場の当事者や専門職者を招いた講義をもったり、社会福祉施設の見学、社会福祉現場やその職種に関する書物等を通じてのディスカッションなどにより、当事者理解・現場理解の導入を行っている。2回生の「社会福祉基礎演習Ⅱ」と「社会福祉実習指導A」では、実習履修に関し、社会福祉の現場へ赴く上での動機づけを行い、進路に悩む学生のサポートを行っている。3・4回生での「専門演習」（ゼミ）では、卒業研究の指導のほかに、実習のフォロー、進路選択、就職支援や国家試験受験対策等を含めた総合的な支援を行う。1～4回生までであるゼミを中心に、ゼミ教員による個別面談を定期的に実施し、小グループあるいは個別での対応をきめ細かく行い、就学に困難を感じずるケースは学科全体で対応する体制を整えている。

社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験受験については、前述のゼミを通じた支援のほか、社会福祉士国家試験対策講座を民間委託し学内で開設している。また、ホームヘルパー2級の講座も民間委託により学内で行い、これは全学に開いているものである。ほかハード面では学科の資料室、自習室を設け、実習支援室スタッフを中心に個別の相談に応じ、自主勉強会の実施の手伝い等ソフト面と連動させた支援を行っている。

(2) 保育士資格取得に関する支援

上述の基盤的取り組みのなかで、保育士に関しては児童福祉を専門とする筆者が保育士資格取得支援の担当であることを学生にインフォメーションしており、ゼミを通じあるいは個人で保育士資格取得に関心のある学生が筆者のもとを訪れ、個別に対応をしている。その内容は保育士資格に関する基本的な情報や受験対策のための勉強の仕方に関するものが多く、保育士国家試験が毎年8月にあり受験出願が4月中であることからか、新年度に入ってすぐの4月の相談が主である。

そのような相談事は直接相談にやってくる学生だけでなく、潜在的により多くの学生がいるのではないかと考えて、保育士資格取得に関する説明会を4月下旬に開催し、保育士資格取得の方法、保育士国家試験の内容、保育士試験対策としての勉強の仕方やそれに関する社会資源の情報提供も行っている。2007年度は1回開催し、25名ほどの参加者があった。2008年度は紹介編と実技試験編の2回を開催し、他学部・学科の学生を含め、のべ50名の参加者があった。

2009年度からは「家族支援論」をカリキュラムのなかで開講し、ここに保育士受験対策の要素を含める計画がある。

3. 就職状況

本学社会福祉学科は、これまでに1期生(77人)と2期生(72人)が卒業している。学科で把握しているデータによると、卒業生全体のうち、福祉サービスを行う営利法人を含め福祉・医療系への就職者は74人(49.7%)、一般企業40人(26.8%)、その他の就職7人(4.5%)、進学11人(7.4%)、就職未決

定と就職しない者などが17人(11.4%)であった。

福祉・医療系での就職者74人の就職先では、高齢者施設・事業が34人(45.9%)、障害児・者施設・事業が22人(29.7%)、医療法人14人(18.9%)、児童系施設・事業4人(5.4%)となっている。職種では、1期生のみ十分ではないものの把握できているところから勘案すると、介護職23人(65.7%)、指導員4人(11.4%)、相談援助2人(5.7%)、その他6人(17.1%)である。

前述した日本社会福祉教育学校連盟による進路等調査(2008)と比べると、福祉・医療系への就職や一般企業への就職率は同様であるが、本学の福祉・医療系への就職者のうち高齢者施設・事業が約半数あり、職種では介護職が65%ほどを占め、相談援助職がきわめて少ない。また、保育に関しては、保育士としての就職は本学では実績がなく、児童指導員として児童系施設・事業に就職したものが3人にとどまっている。

Ⅱ.「保育士資格に関する意向調査」

1. 調査目的と方法

本調査の目的は、保育士資格の取得に関する学生の関心・期待と実態について把握し、本学あるいは当該社会福祉学科において保育士資格取得のためにどのような支援が必要かを検討することである。

調査方法としては、2007年度社会福祉学科の1～4回生に対し、2007年度3月から2008年度4月にわたって質問紙調査を実施した。各学年のオリエンテーション等の時間を活用し、調査の趣旨を説明した上で回答してもらい、その時間中に回収した。

質問紙は、保育士資格の認知度に関する質問3項目、保育士資格取得に関する説明を挟んで、保育士資格取得への関心に関する質問4項目、保育士試験受験のための支援に関する質問4項目と、基本情報4項目で構成した。

分析は、各質問項目の単純集計と、学年や保育士資格に関する認知、保育士資格の取得意思等の変数とのクロス集計およびカイ二乗検定(有意水準5%)

を部分的に行う。全数調査では、検定結果に本来の意味はないのだが、変数間の関連をわかりやすくするために取り入れることとする。それは、学年と回答に関連があるならば、4年間の在籍期間において計画的な支援を提供する必要があること、また保育士資格について知り得ている、保育士資格を取得する意思がある・なしと保育士資格取得支援についての考えに関連があるならば、より適確・適切な支援ニーズを把握できるのではないかと考えるからである。

2. 調査結果

回答は、1回生 32 人（全数 33 人中）、2回生 66 人（68 人中）、3回生 76 人（89 人中）、4回生 69 人（72 人中）の計 243 名から得られ、回収率は 92.7%であった。

(1) 保育士資格の認知度

まず、保育士がどのような職種か知っているか（問 3）については、知っている者が全体で 229 人（94.6%）であるものの、1回生に関しては 80.6%と、有意（1%未満）に知っている者の割合が低かった。

保育士資格を取得する方法を知っているか（問 4）については、1%未満で有意で、1回生で 12.5%、2回生 47.0%、3回生 68.4%、4回生 65.2%で、学年が上がるにつれ認知度が高くなっていた（表 1）。

表 1 学年と問 4 のクロス集計

			保育士資格を取得する方法を知っていますか？		
			いいえ	はい	合計
学年	1 回生	度数	28	4	32
		%	87.5%	12.5%	100.0%
	2 回生	度数	35	31	66
		%	53.0%	47.0%	100.0%
	3 回生	度数	24	52	76
		%	31.6%	68.4%	100.0%
	4 回生	度数	24	45	69
		%	34.8%	65.2%	100.0%
	合計	度数	111	132	243
		%	45.7%	54.3%	100.0%

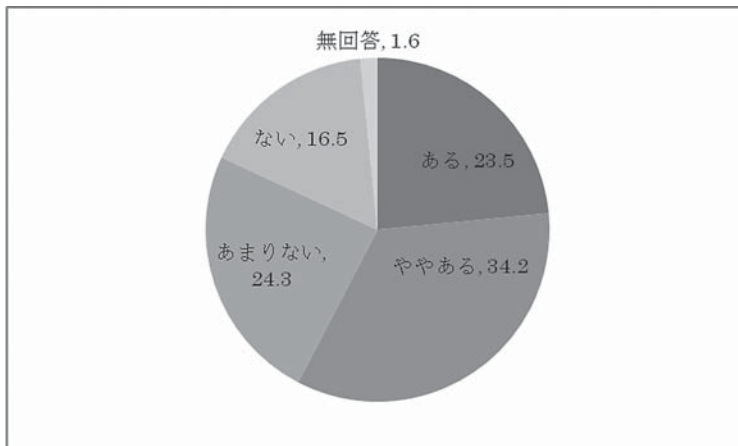
保育士試験について調べたことがあるか（問5）については、「はい」と答えた者が、1回生 15.6%、2回生 19.7%、3回生 39.5%、4回生 24.6%となっており、2回生と3回生を境に調べたことのある割合が有意に（1%未満）高くなっている。

（2）保育士資格取得への関心

①保育士資格への関心度

保育士資格に関心があるか（問6）については、学年での有意差は見られず、「ある」が23.5%、「ややある」34.2%、「あまりない」24.3%、「ない」16.5%となっている（表2）。また、保育士資格を取得したいと思うか（問7）についても、学年での有意差は認められず、全体の37.6%（88人）が取得したいと思うと答えている。

表2 保育士資格に関心があるか



保育士資格を取得したいと思う者に取得方法について尋ねたところ、「本学卒業後、保育士養成校に入学する」が1.2%、「保育士試験を受験する」38.8%、「現時点では決めていない」60.0%であった。学年で有意差はなかったものの、

上回生でも「決めていない」と答えている者が半数を超えていた（表3）。これを問4の保育士資格を取得する方法を知っているかとの関連で見てみたところ（表4）、有意水準が5%未満で有意差があり、取得方法を知らない者に取得方法を「決めていない」者の割合が高く（79.4%）、逆に取得方法を知っている者では「決めていない」者の割合は低くなっており（47.1%）、他取得方法を回答する割合が高いことが見うけられた。

また、実際にこれまで保育士試験を受験したことがある者は18人（2回生2人、3回生9人、4回生7人）で、これは本調査回答者のうち受験資格を有すると考えられる2回生以上の学生（211人）の9%ほどである。この18人中合格した科目を回答した13人の合格科目数（実技を含め9科目中）は、1科目5人、2科目2人、3科目2人、4科目1人、6科目1人、8科目1人であった。

表3 学年と問7のクロス表

			資格取得方法			
			養成校に 入学する	保育士試 験を受験 する	決めてい ない	合計
学年	1回生	度数	0	4	14	18
		%	.0%	22.2%	77.8%	100.0%
	2回生	度数	0	8	9	17
		%	.0%	47.1%	52.9%	100.0%
	3回生	度数	0	11	15	26
		%	.0%	42.3%	57.7%	100.0%
	4回生	度数	1	10	13	24
		%	4.2%	41.7%	54.2%	100.0%
	合計	度数	1	33	51	85
		%	1.2%	38.8%	60.0%	100.0%

表4 問4と問7のクロス表

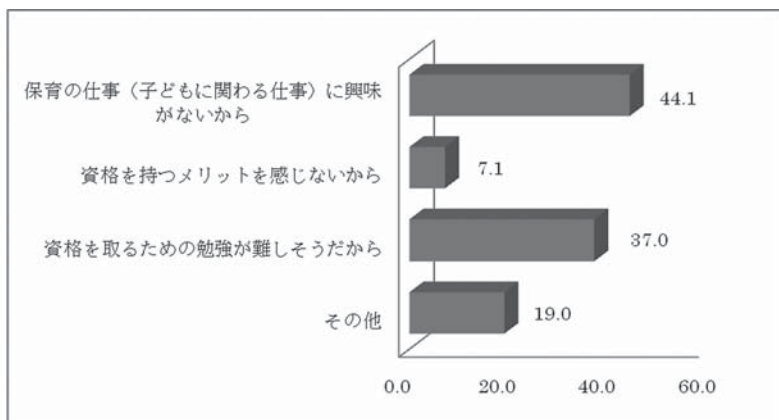
			資格取得方法			
			養成校に 入学する	保育士試 験を受験 する	決めてい ない	合計
問4	いいえ	度数	0	7	27	34
		%	.0%	20.6%	79.4%	100.0%
	はい	度数	1	26	24	51
		%	2.0%	51.0%	47.1%	100.0%
	合計	度数	1	33	51	85
		%	1.2%	38.8%	60.0%	100.0%

②保育士資格に関心のない理由

問6・問7の両方あるはいいずれかで保育士資格に関心が「(あまり) ない」あるいは保育士資格を取得したいと「思わない」と答えた者に、保育士資格に関心のない、あるいは取得したいと思わない理由(問8)を尋ねた。回答に学年での有意差はなく、また保育士がどのような職種か知っているかどうかでも有意差はなかった。

複数回答で、「保育の仕事(子どもに関わる仕事)に興味がないから」が44.1%、次いで「資格を取るための勉強が難しそうだから」37.0%となっており、「資格を持つメリットを感じないから」は7.1%と少数であった(表5)。「その他」の自由記述回答では、「絵が苦手、ピアノが弾けない」「実技試験があるから」という実技に難を感じているものがあつた。また、「他分野に関心がある」や「福祉の資格を取る」(おそらく社会福祉士のことと思われる)といった選択肢にある「保育の仕事(子どもに関わる仕事)に興味がないから」と裏表となるような理由や、「他の資格との両立が難しいから」という他資格集中型(おそらく社会福祉士)の理由があがっていた。

表5 保育士資格に関心がない／取得したいと思わない理由



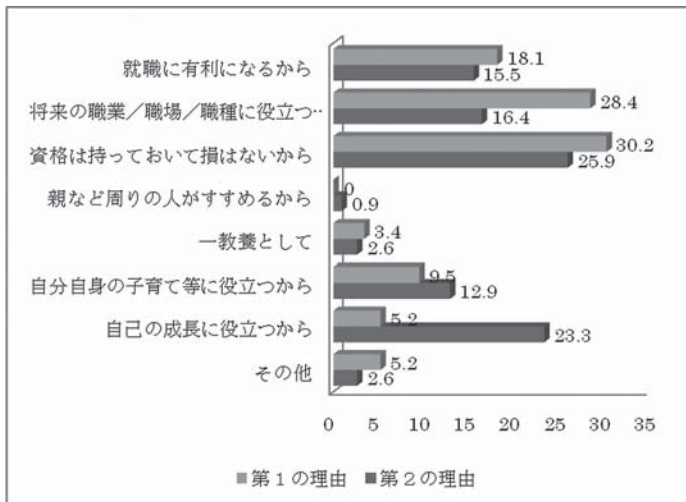
③保育士資格に関心のある理由

逆に、問6・問7のいずれかで保育士資格に関心が「(やや) ある」あるいは保育士資格を取得したいと「思う」と答えた者には、保育士資格に関心のある、あるいは取得したい理由を8つの選択肢から上位2つを選んでもらう形で回答してもらった(表6)。

第1の理由では、「資格は持っておいて損はないから」が30.2%、僅差で「将来の職業／職場／職種に役立つから」28.4%、「就職に有利になるから」18.1%と、この3つで80%ほどを占める。第2の理由では、「資格は持っておいて損はないから」が25.9%で最も高く、僅差で「自己の成長に役立つから」が23.3%、そのあとは順に「将来の職業／職場／職種に役立つから」「就職に有利になるから」「自分自身の子育て等に役立つから」が10%台で続く。第1の理由でも第2の理由でもトップは「資格は持っておいて損はないから」であるが、第1の理由では将来のキャリアに役立つ理由が多いのに対し、第2の理由では成長志向の理由が将来のキャリアを志向した理由よりも割合が多い。

この質問項目と学年、また「保育士がどのような職種か知っているか」や「保育士資格を取得する方法を知っているか」という認知度との関係では有意差は認められなかった。

表6 保育士資格に関心がある／取得したい理由



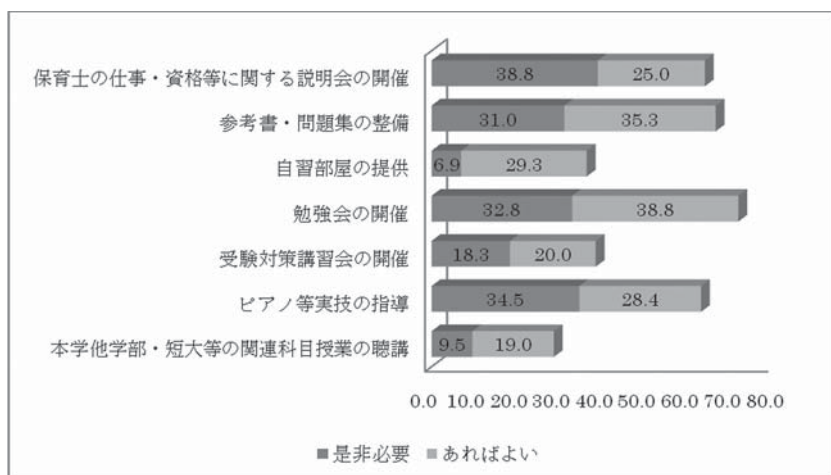
(3) 保育士試験受験のための支援

①保育士試験受験のために望む支援

問6・問7のいずれかで保育士資格に関心が「(やや) ある」あるいは保育士資格を取得したいと「思う」と答えた者に対し、保育士試験受験のためにどのような支援を望むか(問10)について、選択肢を7項目提示し「是非必要」か「あればよい」で回答を求めた(表7)。「是非必要」と「あればよい」を合わせた割合で希望の高いものから順に、「勉強会の開催」が71.6%、「参考書・問題集の整備」66.3%、「保育士の仕事、資格取得に関する説明会の開催」63.8%、「ピアノ・絵画・工作・設定保育等の実技の指導」62.9%と並んでいる。「その他」の自由記述回答には、「学校の先生達がもっと協力的に授業をやってほしい」というものがあった。この質問項目について、学年や保育士の認知度に関する変数による有意差は認められなかった。

勉強会の開催については、「是非必要」「あればよい」と答えた者(79人)のうち「週に1回」を望む者が69.6%、「2週間に1回」24.1%、「1か月に1回」6.3%で、高い頻度での開催を希望している。

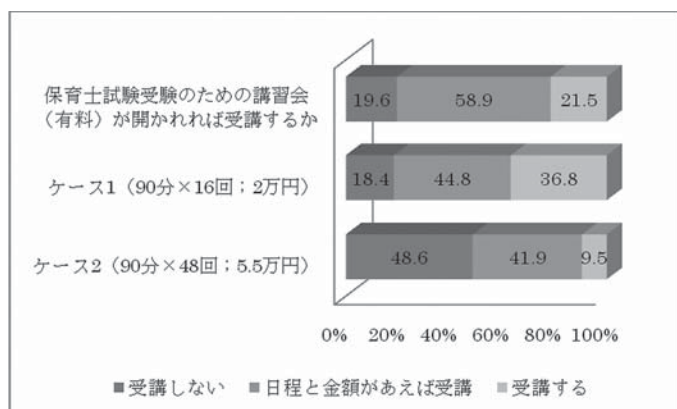
表7 保育士試験受験のために、どのような支援を望むか



受験対策講座の開催については、日程と受講料の限度額の希望についても尋ね、23人から回答があった。開催時期については、6月が圧倒的で、4月から7月の希望に集中していた。受講料の限度額については、1万から5万ほどの幅であるが、1～3万円が中心であった。

さらに、保育士試験受験のための講習会（有料）が開かれれば受講するか（問11）について、モデルケースを2つ提示した上で尋ねたところ（表8）、「日程と金額があれば受講する」が半数ほどで、「受講する」と合わせると80%ほどになる。モデルケース1（90分×16回、問題集・解説書16冊付き、20,000円）では、「受講する」の割合が36.8%ほどになり、ちょうど問10の受験対策講習会について「ぜひ必要」と「あればよい」を合わせた率と同程度である。一方で、モデルケース2（90分×48回、各教科のテキスト8冊付き、5,5000円）では、「受講する」はわずか9.5%で「受講しない」が半数近くに上る。モデルケース1と2の結果の差異は、問10の受験対策講習会において尋ねた限度額の結果と重なる。

表8 保育士試験受験のための講習会（有料）が開かれれば受講するか



②保育士試験受験のために実際に取り組んでいる事

保育士試験を受験するために取り組んでいる（取り組んだ）ことを尋ねた（問12）。この質問では、無回答も多く74人から回答が得られた。その結果、「通信教育を受講」が6人、「民間の受験対策講座の受講」が3人、「参考書や問題集等による自己学習」が19人であり、「その他」での記述はなかった。この人数は国家試験の受験経験者18人とほぼ合致するが、受験対策はほぼ自己学習に頼っている様子がわかる。

③保育士試験突破に必要な事

保育士試験を突破するために何が必要か自由記述で求めたところ、14名から回答があった。

「とにかく勉強」「社会福祉士受験と同じくこつこつと勉強するほか方法はない」「諦めずに勉強」「自信」や、「時間」「精神的にも時間的にも余裕がない」、「ここがでるというポイントをしっかり覚える事」など、自分で継続的・戦略的に勉強する必要性を訴える内容のほか、そうするための環境を求める声「やる気を出せる雰囲気づくり」「教材、勉強しやすい場所」「継続的に学習し続けることができる環境」「仲間」「教員がもっとかかわってほしい」といったものがあがった。

また、勉強内容での苦勞として、「勉強するピアノ実技の練習だけでは、大変だと思う」「授業だと思います。栄養や教育原理、保育原理などは特に独学では身につけにくいと感じました」といった社会福祉学科のカリキュラムではカバーされていない内容に関するものがあった。

そのほか、「保育士の資格の時期が5月くらいだったと思うのもっと多くの人にどんな資格かなどの情報を伝えた方がいいと思いました」「保育士さんから直接話を聞く機会が必要だと思う」といった、保育士がどういった職種であるかや保育士資格取得に関する情報を提供する機会を求める声もあった。

Ⅲ. 考察

1. 保育士資格への関心と資格取得意向に関して

本学社会福祉学科の学生において、保育士という職種やその資格の取得方法についての認知度は高く、保育士資格取得への関心も、「ある」だけで4人に1人、資格を取得したいと思っている者は実に全体の4割弱と、かなり高いことがわかった。しかしながら、保育士試験について実際に調べたことがある者の割合は関心度や取得意向で見られるほど高くはなく、実際に保育士試験の受験に至っている者は保育士試験の受験要件を満たすと考えられる者の10%を割る。

この結果は、入学時に資格取得意向はあっても実際に取得する者になるとそれほど多くはなかった、織田ら（2006）の短大生を対象とした調査研究の結果と類似している。織田らの研究では、卒業直前の2年生に取得可能な資格を取得しなかった理由をたずねているが、資格取得の困難さや時間拘束の理由、あるいは卒業後直ちに就職と結びつかない資格は必要性を感じないという理由で資格取得を断念する様子がうかがえる。本学科の保育士資格に関しても、関心のない者に対する関心のない理由には同様の理由が示されており、とくに社会福祉士の国家試験を卒業時控えている本学科生らにとっては、在学期間中に複数の国家試験にチャレンジするのはかなり大変なことであろう。

また、保育士資格取得に関心がある、あるいは取得したい者にたずねたその理由であるが、第1の理由・第2の理由ともにトップが「資格はもっておいて損はないから」であった。冒頭での私立大学生に対する調査のようにキャリア形成の一環とした大学への期待も高まりつつあり、第1の理由にキャリアを意識した回答も多かったのではあるが、上述の「もっておいて損はない」層のように、取得の動機づけがとばしいといえる層はまだ多いのかもしれない。

このことから考えると、本学でも1年次からキャリア教育に取り組み始めているが、社会福祉士養成をめざす比較的将来のキャリアがはっきりとした本学科の学生に対しても、大学教育のなかで資格取得をどのように考えるのか等にも焦点をあてた教育、あるいは資格取得支援の一環としての取り組みが必要なのかもしれない。

2. 社会福祉学科生における保育士資格取得の必要性

前項とも関連して保育士資格取得支援を考えるに、保育士資格が社会福祉を専攻する学生の将来にとってどのように役立つのか整理して情報を提供する必要性を感じる。

というのも、大学で社会福祉を専攻する者にとって保育に関する仕事に就く場合に保育士資格が求められる職場というのはかなり限られているからである。児童福祉分野の施設・機関では保育職に就くにも、社会福祉専攻ということで求人要件を満たしている場合が多い。社会教育等の分野における児童関連事業についても同様である。明らかに保育士資格が必要とされるのは保育所くらいのものである。もちろん社会福祉専攻ということの上に保育士資格を有していれば就職に有利に働く可能性はあるであろう。しかしながら、それを裏づけるデータや情報はきわめて乏しい。

たとえば、保育所以外の児童福祉施設では、保育士の従事者数は分かるものの、それら保育士の教育的バックグラウンドなりの実態を示す資料は筆者が探したかぎり見あたらない。そして、保育所に従事する保育士についても同様である。保育士養成校卒業者の就職・進路についてのデータからすれば、その卒

業者数と保育所への就職者数から保育所保育士は保育士養成校出身者がかなりを占めるであろうことが推察される。それら保育士養成校出身の保育士らと比べ、保育の専門知識の多くを独学で学び現場経験に乏しい国家試験による保育士にとって、保育所への就職というのも容易ではないであろう。

もちろん児童領域の職に就こうと思えば、社会福祉学科にはない保育関連の知識や技術は、現場に従事した時に大いに役立つのは確かである。しかしながら、保育の知識や技術を習得することが保育士資格試験の合格なのかはまた意が異なるのではないかと感ずるのである。

また逆に、2003 年施行された「児童福祉法の一部を改正する法律」により保育士資格が国家資格として法定化され、その業務に「保護者に対する保育に関する指導」が加えられたこと、さらに保育所等に地域に対する子育て支援が求められだしたことにより、ますます社会福祉（ソーシャルワーク）の専門知識や技術が保育士に求められている（柏女 2007：鑑・千葉 2005）。しかしながら、前述したように、社会福祉の専門教育を受けた社会福祉専攻出身の保育士なりが保育現場にどのように貢献しているか、どのような評価を得ているのかはよくわかってはいないのである。

このようなことを鑑みると、保育士として保育現場に携わりたいという意向のある学生に対してはとくに、保育士資格取得がどのように就職に活きるのか等についても、より適確な情報をもって資格取得支援を行う必要があるであろう。

3. 保育士資格取得支援の導入について

本調査において、保育士に関する認知度が学年により上がっている、また、実際に保育士試験について調べるのが上回生で多い結果や、取得方法について「現時点では決めていない」割合が6割あり、取得方法の認知の有無と関連している結果を見ると、保育士試験にチャレンジできる時期から考えれば、学生たちの動きは遅いともいえる。

保育士資格取得に対する動機づけはさておき、学生の関心が高いにもかかわ

らず、取得方法を知らないから関心があっても取得方法を決めていない、決められないということであれば、在学期間の早期から保育士資格について知り、保育士試験を受験するならその準備を計画的に進める機会を提供する必要性があるであろう。

現在も年度はじめに保育士資格に関する説明会を行っているが、調査の自由記述回答で「もっと多くの人にどんな資格かなどの情報を伝えた方がいい」とあったように、説明会開催を学生に周知し、少しでも関心のある学生は参加するようにうながすことが大切である。また、このような機会は年1回ではなく、時期を考慮して複数回提供することも効果があるであろう。

また、保育士職の理解をうながすために、「保育士さんから直接話を聞く機会が必要だと思う」といったことも資格取得支援の導入として取り入れていくことも考えていきたい。

4. 保育士試験科目の勉強方法について

保育士試験は、大学に2年以上在学し、かつ62単位以上修得あるいは見込みで受験することができる。試験科目は、筆記試験8科目（社会福祉、児童福祉、発達心理学および精神保健、小児保健、小児栄養、保育原理、教育原理および養護原理、保育実習理論）と保育実習実技試験（筆記試験のすべてに合格した者のみ受験可能で、音楽・絵画制作・言語の3分野から2分野を選んで受験）である。合格した科目は、翌年および翌々年に限り当該科目の受験を免除されるということで、最長3年をかけてチャレンジできるものである。

社会福祉学科の学生にとって、筆記試験8科目中社会福祉学科のカリキュラムと重複する科目は社会福祉、児童福祉、養護原理、精神保健であり、発達心理学は心理学に含まれている部分もある。それらは卒業時の社会福祉士試験とも重複するので、社会福祉士試験の受験を目指す学生にとっては速かれ遅かれ試験準備の勉強を行う必要のあるものである。このことを勘案するに、その履修時期とのかね合いに考慮し、受験時期や最長3年のプロセスにおける勉強にとりかかる科目とその時期を学生個々の考えを踏まえて個別に計画立てる支援を

行うことが有効であると考える。

社会福祉学科のカリキュラムに含まれない試験科目はとくに、どのように勉強すればよいかについての支援については、学生が望む支援の調査結果を考えると、一つは2009年度より開講される「家族支援論」でいくらかカバーしていくことがあげられる。しかしながら、最も望まれ、大切なのは、継続的に勉強できる雰囲気、環境づくりであり、それは自習室や教材の提供では不十分で、同志とともに勉強できるような場の提供である。

調査結果では、受験対策講座といった講習会は不人気で、むしろ週1回くらいの勉強会を高く望んでいる。本社会福祉学科の資格取得支援のなかでは、社会福祉士の受験対策として希望者に対し4回生時に自主勉強会を実習支援室スタッフの助けて週1回行っている。そこでは模擬試験のやり直しや実習支援室スタッフお手製の練習問題などにみんなで取り組み、実習支援室スタッフも一緒に回答を探すといったことを行っている。まったくの学生主導型の自主勉強会ではない。調査にあった「教員にかかわってほしい」というのも保育知識・技術の求めだけではなく、このようなガイドを少し引く役割も期待してのことであろう。社会福祉士受験対策の自習勉強会に実質参加している学生は10～15名と受験する学生数からすると15%程度なのだが、学科カリキュラムそのものが社会福祉士養成である上での社会福祉士試験と保育士試験ではそのような勉強会の求めの度合いも異なり、保育士試験を目指す上での勉強会の求めは調査結果が示すほどに高いのかもしれないと考える。

講習会については、保育士資格取得支援としては優先順位が低いと考えてよさそうであるが、講習会を提供する場合は、有料の講習会の参加は金額に影響を受け、その額は一人2万円前後までが妥当ということを念頭に講習会内容を考えていくといった方策が必要のようである。これまで、外部の受験対策講座や講習会の情報を提供してきたが、調査結果にもあるように、民間業者のものに参加している学生はきわめて少なく、また無料で参加できる社会福祉協議会等が提供する講座も閉講になりつつあり、学生が利用しやすい外部の社会資源は乏しいということもおさえておく必要がある。

5. 実技の習得

保育実技については、調査結果においても学生が支援を高く望んでおり、また、保育士資格取得に関心がない、あるいは取得したいと思わない学生の理由にもあげられているものである。

保育士試験における実技試験は、前述したように、音楽・絵画制作・言語の3分野から2分野を選んで受験する。音楽はピアノなどの伴奏楽器を用い弾き歌いする。絵画制作では、たとえば『保育所（園）での保育士と子どもたちとの活動の一場面を表現する』というテーマのもと表現に関する条件が提示されB4版の用紙に絵を描くなどして作品をつくる。言語は、童話等の読み聞かせである。一見、芸術的レベルの高さが大変問われそうな印象を受けるのではあるが、それらは子どもの発達に合わせて子どもに対する保育活動としての目的・内容であって、技術的にきわめて高いレベルが要求されるといったものではない。また、課題やテーマは保育士試験の受験要項が出された際に提示されており、実技試験受験の10月までに数ヶ月あり、事前に準備していくこともできる。

本学社会福祉学科では、実技指導に関する具体的な支援を提供した実績は皆無に等しいのではあるが、保育士資格に関する説明会や個別の相談時に上記のようなことを学生に伝え、過去に出題された課題やその模範解答を見せたりすると、なんとか取り組みそうだという感覚を示す学生が多くあった。まずは、このような情報提供を相談に個別に来る学生だけでなく広く行っていくことが基本となろう。また、受験準備のなかで、実際の試験と同じような雰囲気や条件をつくる模擬試験を学内で行う支援ができることを伝えている。技術的指導は学科スタッフの知る限り気づく限りの範囲にはなるが、試験当日の緊張感などを緩和する場馴れの機会としてはかなり役立つであろう。

もう一つ学生に奨めていることは、保育現場でのボランティア等を通じ、実技をさせてもらう機会をもつことである。実際に子どもたちに対し弾き歌いや読み聞かせ等の実践を積み重ねることで、保育士試験対策だけにとどまらない

技術の習得につながるわけであるし、何よりそこにいる保育士からも助言や指導をいただくこともできるだろう。そのような助言を受けて、もともとボランティア等でかかわりのある保育現場に申し出をし、実践の機会を得た学生もある。さらには、そのような目的・意図を了承した上で学生を受け入れてくれる保育施設を学科がもっておき、適宜学生に紹介し送り出すような体制を整えておくことも考え得る。

おわりに

保育士資格取得支援というテーマを通じ、他大学の資格取得支援の現状等を知る機会を筆者自身得ることにもなり、本学および本学社会福祉学科がかなり多種多様な資格を提供あるいは取得支援していることを改めて認識するに至った。しかしながらその一方で、エンロール・マネジメントやキャリア教育による取り組みが全学的にすすめられ、大学教員に求められる役割や業務は増し、学科独自が実績を積み重ねてきた取り組み等との調整や新たな体制づくり・取り組みも必要になっている。

本研究では、保育士資格取得についてどのような支援が学生にとって利得があり役立ち得るのか、学生に対する意向アンケートを実施した結果から多くのヒントを得た。これらを具体化し整備していくことが、今後の課題である。

引用・参考文献

- ベネッセ文教総研（2000）『教育改革と人材育成の方向性 2000 年版』ベネッセ文教総研。
- 鑑さやか・千葉千恵美（2005）「社会福祉実践における保育士の役割と課題～子育て支援に関する相談援助内容の多様化から～」保健福祉学研究 4, 27-38, 東北文化学園大学。
- 柏女霊峰（2007）「保育士資格の法定化と保育士の課題」淑徳大学総合福祉学部研究紀要 41, 1-18。

- 葛城浩一・山田浩之 (2005) 「F ランク大学における学習活動 ―資格取得に
 駆り立てられる学生たち―」日本教育社会学会大会発表要旨集録 57, 65-66.
- 国立教育政策研究所 (2003) 「大学・短期大学における資格取得の実態に関する
 全国調査 ―新しい時代における大学と産業社会との相関システムの構築
 に関する調査研究」
- 河野志穂 (2005) 「大学における資格取得支援の現状 ―経済・経営・商学系 4
 年制私立大学の場合」日本教育社会学会大会発表要旨集録 57, 287-288.
- 中島裕 (2008) 「大学社会福祉系学科における「キャリア教育」 ―先駆的な「キャ
 リア教育を実践している大学に対する訪問調査より―」関西福祉科学大学紀
 要 11, 197-204.
- 日本私立大学連盟 (2007) 『私立大学学生生活白書 2007』日本私立大学連盟.
- 織田真未・石堂友美・浜田しおり・永井康代・園田充子 (2006) 「女子短期大
 学生の資格取得に対する意識」大阪薫英女子短期大学生活科学科研究誌第 12
 号, 1-7.
- 社団法人日本社会福祉教育学校連盟 (2008) 「社会福祉系学部・学科、大学院
 卒業生の進路等調査報告書」
- 寺山節子・畑晶子 (2006) 「訪問介護員養成研修 2 級・1 級終了証書取得者の就
 労に関する傾向と課題 ―卒業生へのアンケート調査を中心に―」中国学園
 紀要 5, 141-144.
- 山田浩之 (2003) 「地方私立大学における新入生の学習志向 ―松山大学経営
 学部新入生調査を中心に―」教育社会学年報第 6 号, 広島大学大学院教
 育学研究科教育社会学研究室. 葛城浩一・山田浩之 (2005) 「F ランク大学
 における学習活動 ―資格取得に駆り立てられる学生たち―」日本教育社会
 学会大会発表要旨集録 57, 65-66.

